假名の習ひ方

太宰春

特257
971

始

特257
971

松下太虛書

假名の習ひ方

和歌卅首
東開紀行

東京　峯文莊發行

假名の習ひ方

松下太虛

假名には平假名・片假名・變體假名等がある。片假名は漢字の一部をかり、書き方も同一であるゆゑこの書體は省略した。

平假名・變體假名はいづれも草書より出たものであるが、日本獨特の風趣を以て發達した。從つて漢字の草書以上の筆致がある。

假名は普遍に世に行はれて識らないものは無いが、書寫の技術は輕視せられて、過去に發達した優雅典麗の趣を失ひしのみならず、明快暢達の姿もないのは殘念である。

平假名の日常目に觸れるものは大抵印刷の活字體で、書寫に適せぬものである。由來印書體は漢字でもローマ字でも、おのづから相違あるものである。假名に於ても亦然り。

平假名は凡べて曲線を以て組織せられてゐる。その向背・俯仰・旋轉の間に連綿自在であらねばならぬ。

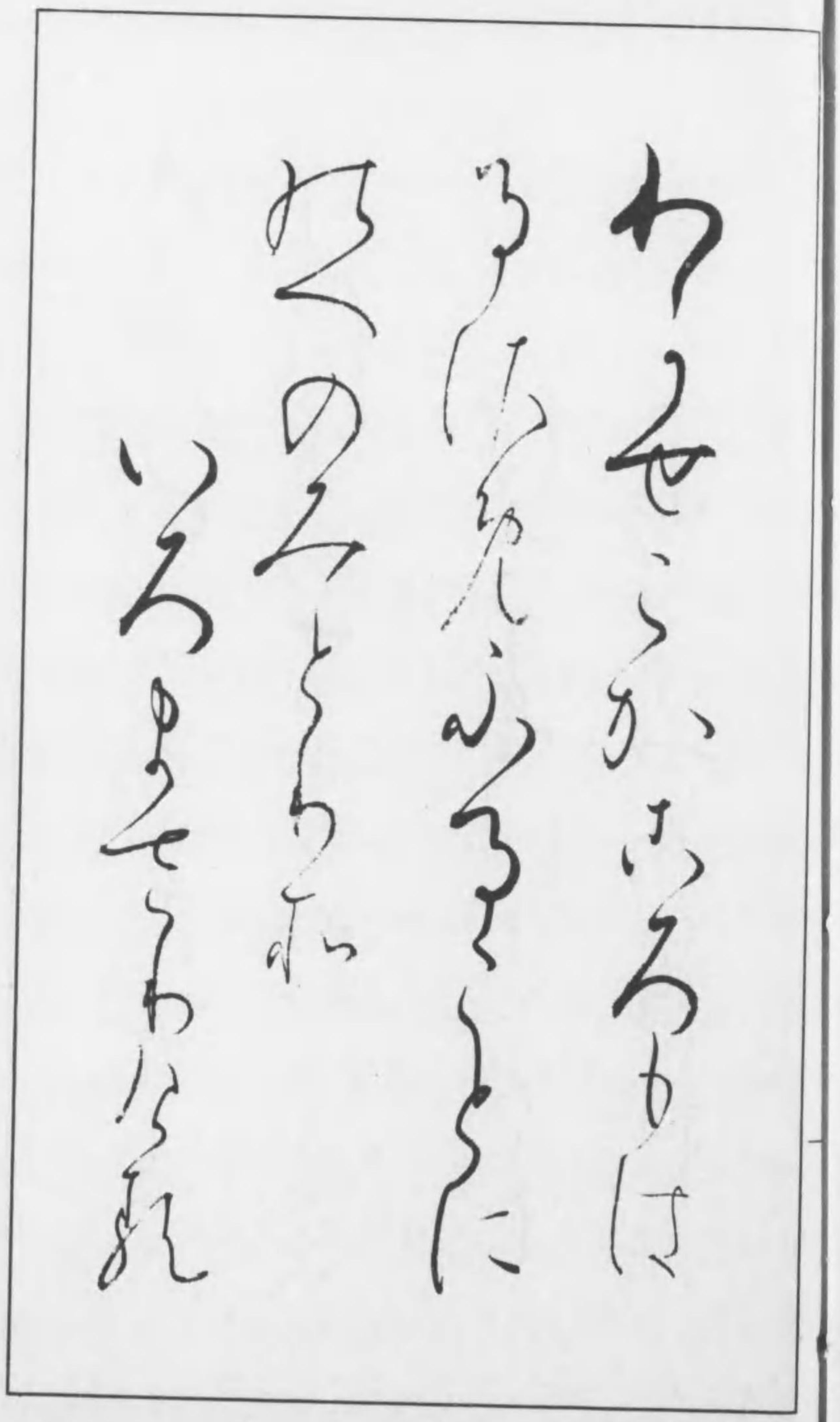
初めに單體を習得することが大切である。假名は漢字の草書より出たものであるから、その字源よりの推移を察して、漸次二字三字と連續する場合にもくづれて讀み難い字が出來ぬようにせねばならぬ。

この帖にても第一に、いろはの單體を繰返して、よく習練せらるゝことを希望する。一回分は一頁(四行六字)を半紙一枚に習はれてもよいが、二行四字かまたは三行五字づゝ半紙に大きく書いて見らるれば結構である。

實用のみには變體假名の要なけれど、趣味として和歌俳句等を書くには物足らぬものであり、草書をおぼえると思つてもよいから、これを第二に習はれたい。

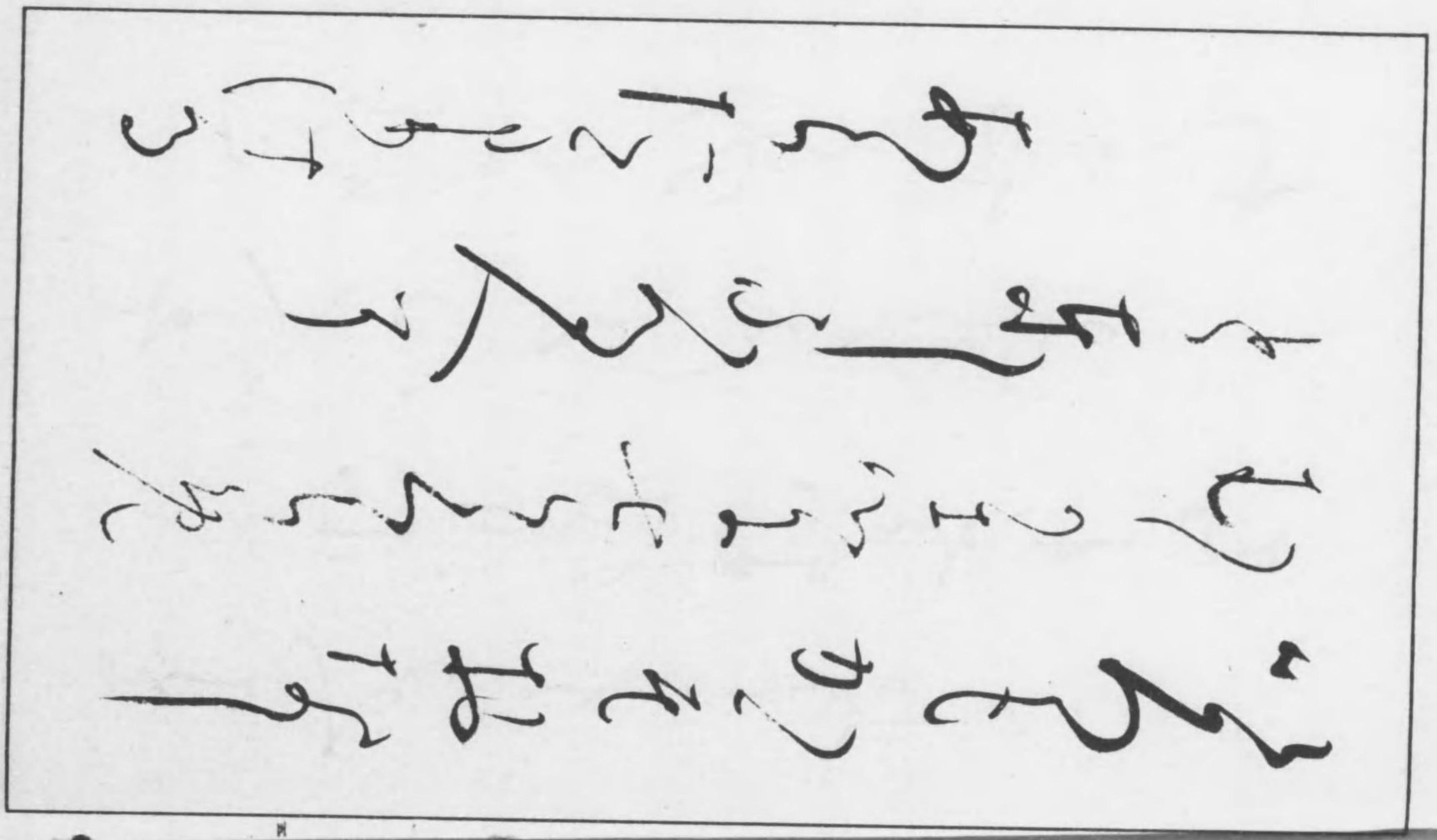
次に和歌・紀行と進まれるのが順序である。こゝに至りて連綿・輕重・濃淡に注意し、流麗なる線條を以て自在に明淨高雅な境致を表現すべきである。

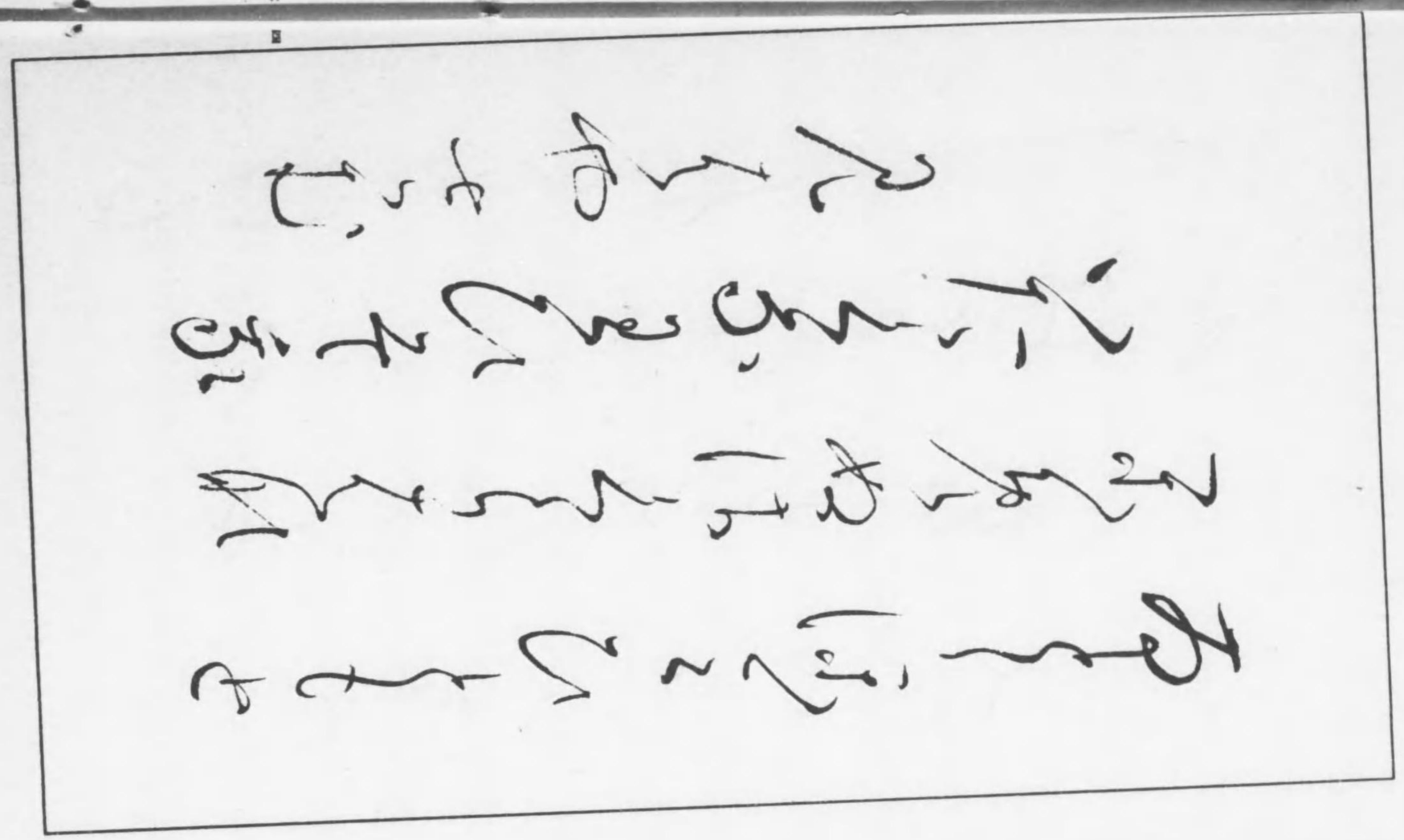
(終り)

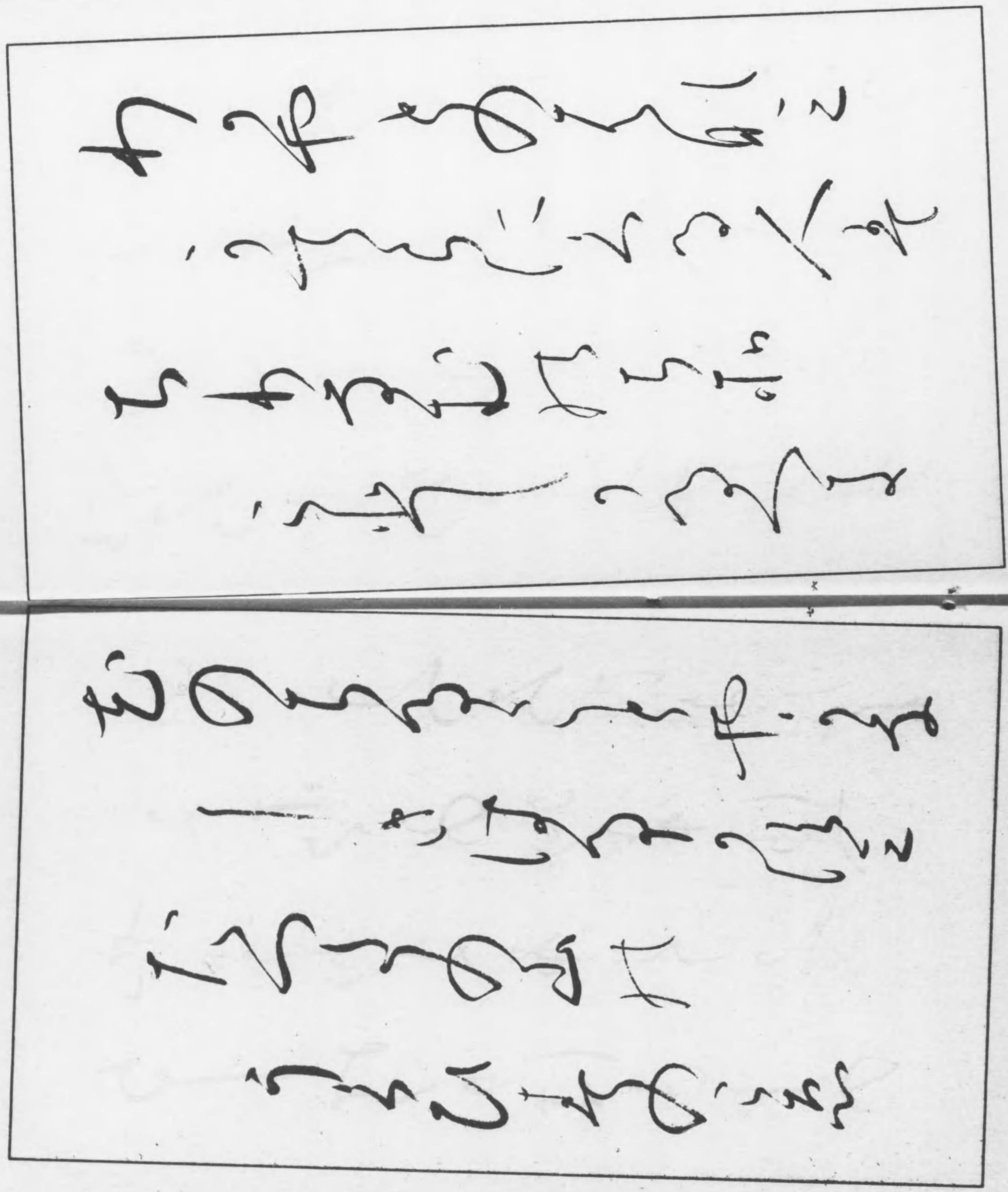


みちのくをゆきて
うたをよみてとめたるハ
はるをはるくるも
ふるふるに

年ゝとれくるはひ
そおとゝぬしかゝあ
れと玉ゝ尾まを
そのおもひもな

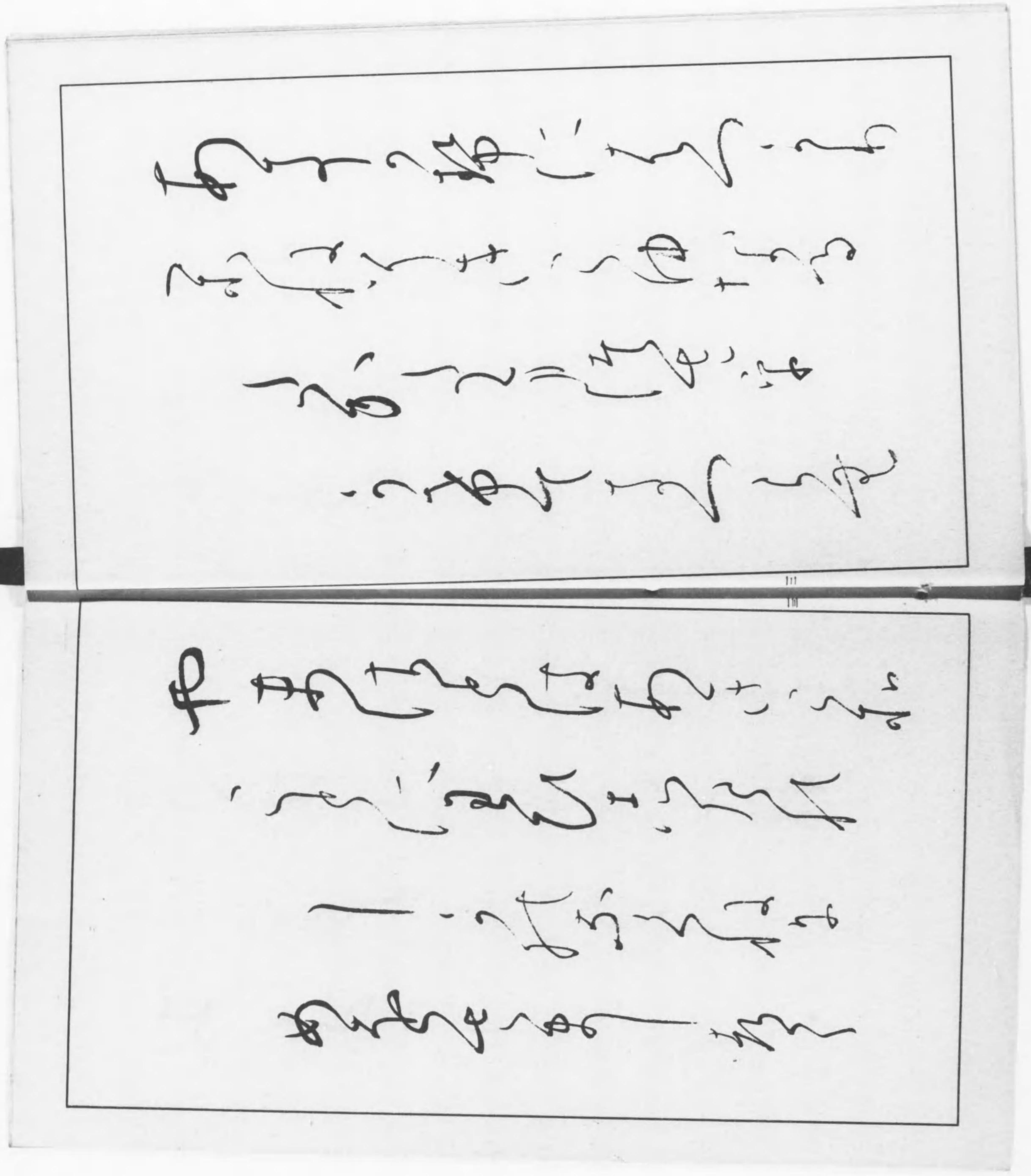


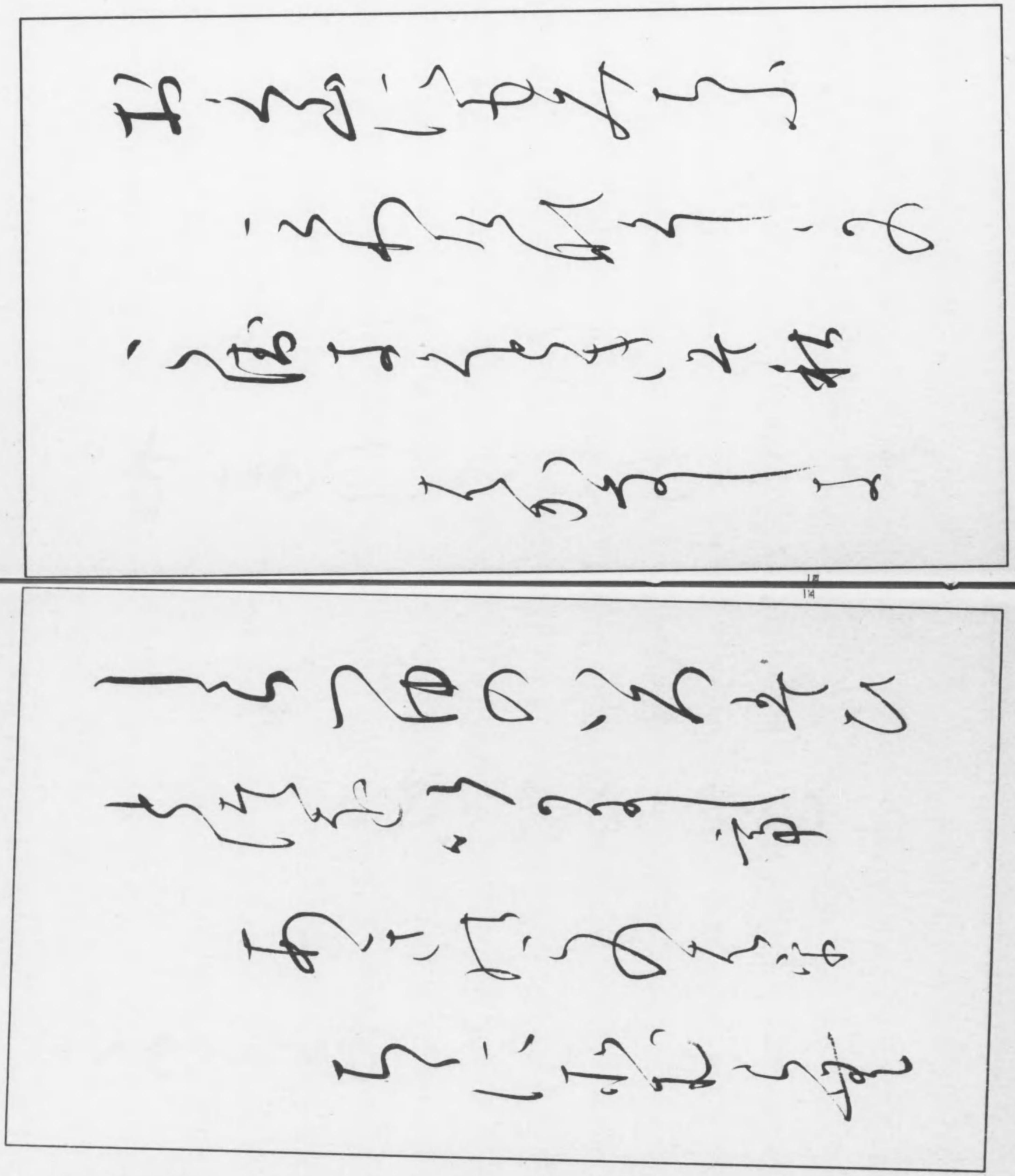




ちりはきーの
やまぶきそを
よかりあはせ
うつろひまがれ

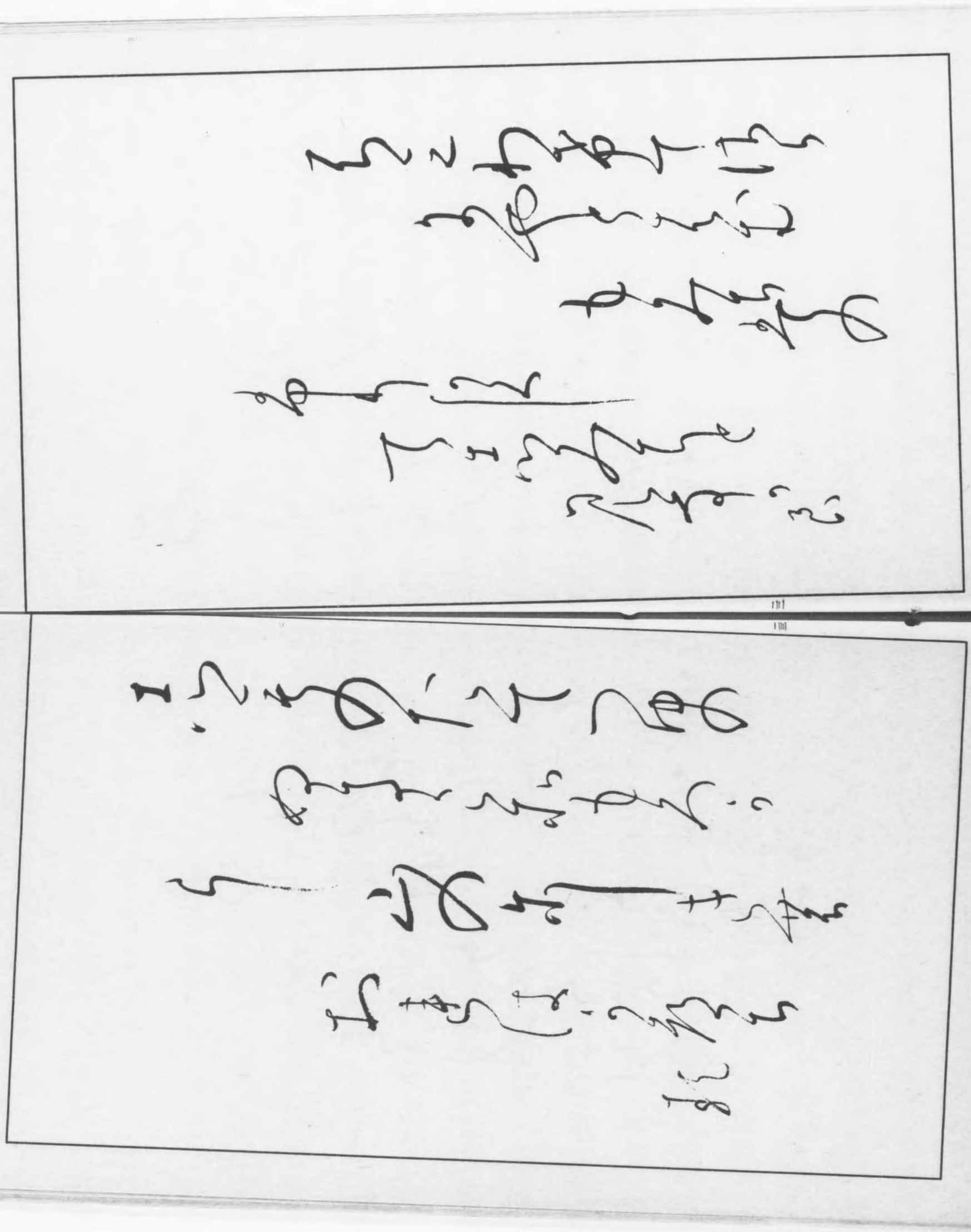
ほそまきふく
もものなかにあれそ
はかりとられぬ
おもふそのから

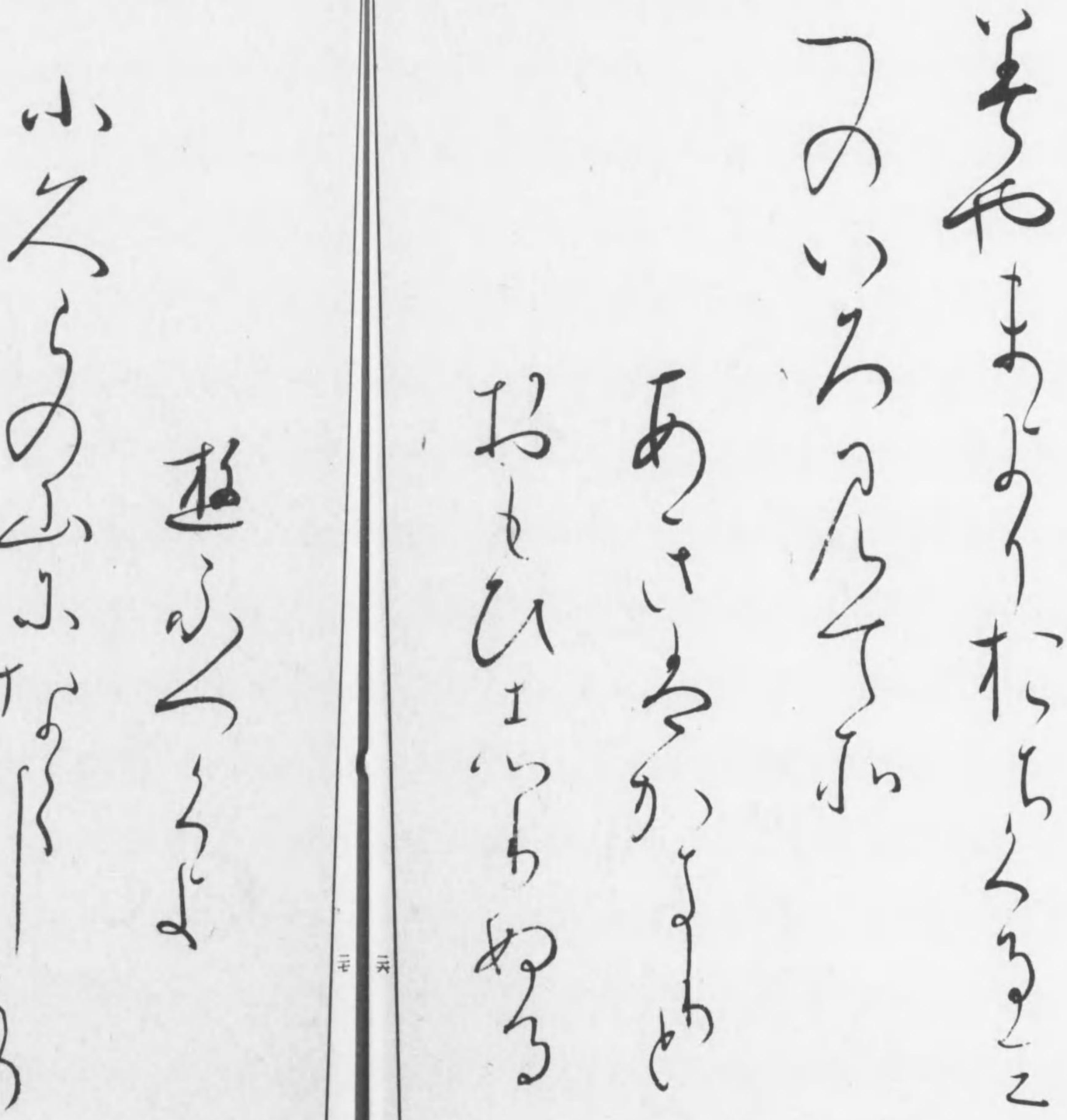


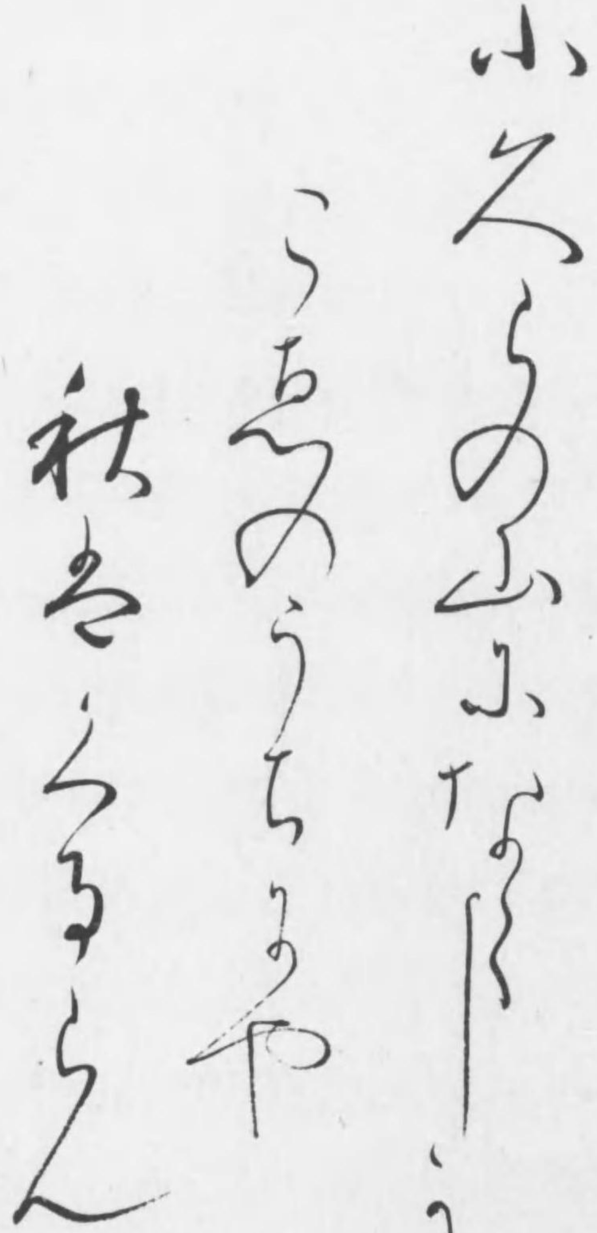


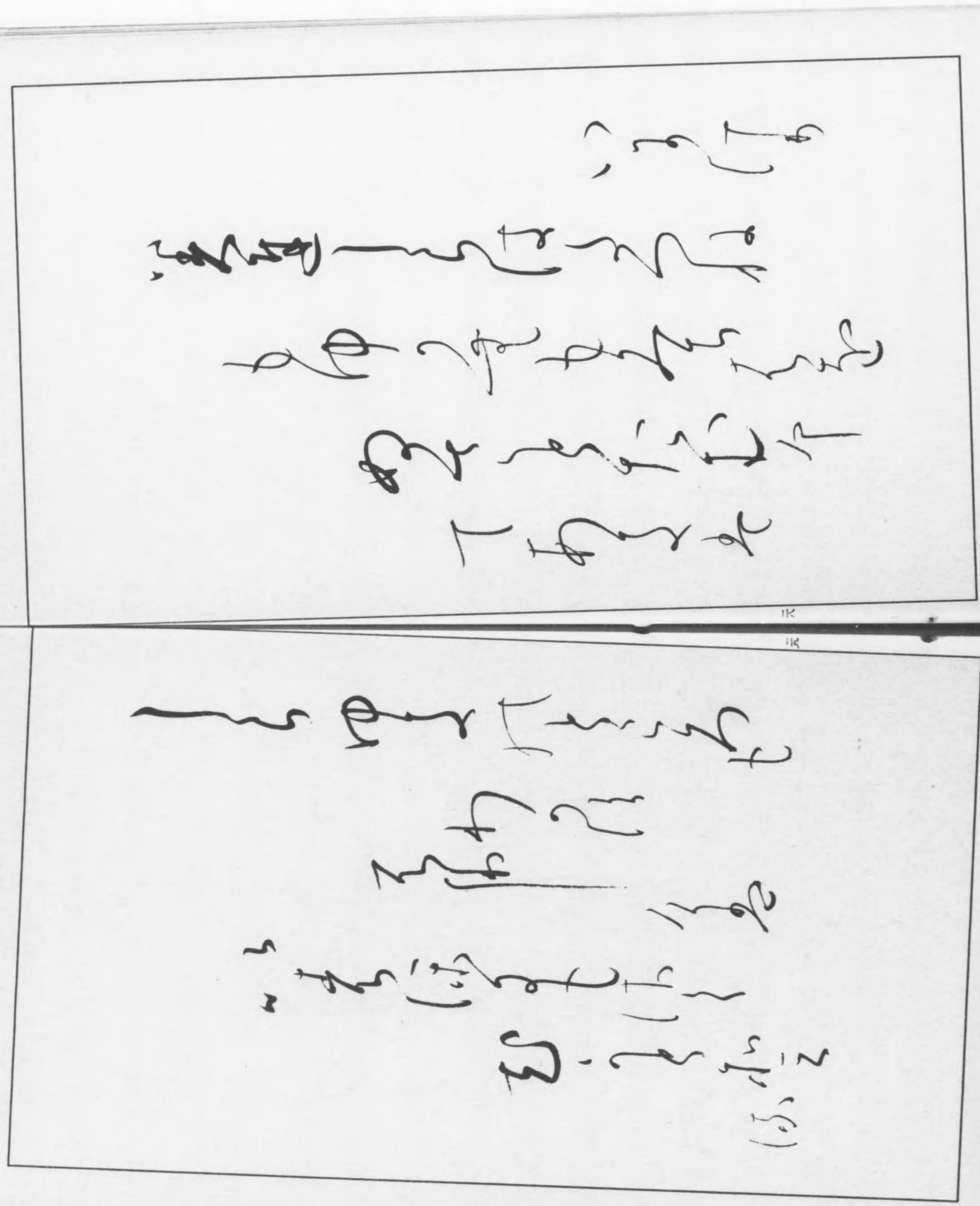
あるかの
いつまでかはふらむ
しに　秋にあるを
市
祭
たましみち

あれたかれとも
ちはまの三ちみち祭
はは無ふ人は
ふるそてる









うちの事のふくお
きるゆまにうち
ちせたれう
こら東わまで
をうちもん

仁治

都

出

赴

道

かくほにおもてぬ
ちに仁治三年の秋八
月十日あまりはらう春
を出て東へ部くこと
あわまたらぬ道のそ

山江
遠旅
雲霧
前途

ら山うちなく江うはふ
てはるゝ音よ旅すれと
も雲ゐのさ霧なわ
なくて山ゝ音遠はま
はしわれまにちむ

餘日
鎌倉
野亭
水流
砌

殆ん十餘日の日数をへて
鎌倉に下りつゝ百成
は山陵野亭は夜のもゝ
わ或ゝ海邊水流の所は
かなる砌よりへるに

目立

目に立つ恋心とまるふ
しゝを書きおきて忘
れぬる思ふ人もあらふ
おのゝ恋ぞかたこ
もなれとてふ

忘

忍

後

住家

東山の麓なる住家を出
て相坂の関うちこゆる

相坂

望月

ほゝに鈎ひきわたる望
月はいつもあうゝ近き

近

空

空すみて秋きりたち

夜

わたりてちかき夜の月

木綿付

かゝゆめのゝなかに　木綿付

鳥

雪ふりたちたにおちつゝき

遊子

て樫子もれて残月ふ行き

函谷

らむ函谷の雪孫おもひ

蟬丸

いてらるむかし　蟬丸ゝい

世捨

ゝけるあ世捨人らの軍の

床結

雪よわらゝ屋の床を結ひ

琵琶

て琴琵をひきて

大和

うゝをはしり　大和歌

詠述

嵐

延喜
第四

関
河原

を詠しておもひを述べけ
る嵐のはげしきを
わびつゝ和歌をよみける
あふ人のいそく蝉丸を逗
延喜第四の宮にておはし
けるゆゑよしある実のあ
りを四の宮河原と名付
あゆたらからくれ
ゆふ霧のまよひやの
とみのあかりまでて

三條
還御
清水

東三條院石山にまうて
て還御に賀茂
清水をまきけるたぶ

歌

影

ちてちまさせもとひなる
所あまたひゆきけ
ふもりのけきは水なけ
ちてうさちの新そうな
しまはしらゆるさ拾

心

いうけるゆゑ心なり

ちにゆゑあはきにかか

そられ

過

関山をるきぬれくうち

濱

てのあたらの京なん

天智

飛鳥

岡本

志賀

ときけともはたらたそ

見えわかなる昔天智天皇

乃御代やまとの国飛鳥

岡本の宮より近江なる

志賀の山ほとりなる新うた

大津

皇居

わかて大津の宮を
ほろぼしけるさまを
もしるすなり中ほど
皇居の跡をかしるおほ
えてあれども

名残

夢なるかおもむきのの
ゑ面はあれどよりて名
のみ殘るつかの布
ちるを
あけぬの空に成りて

長橋

湖

滿誓

比叡

都なの長橋うちわたす
ほそ湖まろかまあたら
れてこの酒盛は弥うけ
叡山にてはめうみを望
こうよりあちこんにおお

出

波

心

古中

もも出てうれてうきゆ
くなのあれしう波
まくにてなくしほに
古の中をいまよ橋ふ
ねにうれくけなかあ

しあとをまたそ
なりける

行過
野路
草露

この原とをを行き過て
壁ぬらす所ふりぬ
草の原露しらしそ

袖

朝

旅ぬいつか袖のしをれ
ゝをを

あつる路のちの秋を
ゆき所をしるしるを
まつはをなる

篠原
西東
堤北
南池

篠原ふくゝゐを見
れば西東はるたすの
き堤あり小にて室人住
みかなまち見南下池

遠見
松
波色
南山

のはるゝて遠くを見えわ
たるむらのひのみきる
こゝかゝる松のむら
たち波はたもひとはに
もなりて南山のくのなを云

青洸瀁

角もとをとして
洸瀁たるちまたの所に
ゆらひてあるかた
みなおひまたまる
中にをかまのうちむ

宿今

ひらかふもとに
をしけるあらふ
わ都をたに格人らの百
にふかまりまるか
今はうちをほたく

家居

ひのみおほくて家
居もまちまちにふくゆく

變

しらきくもは変り遊

川

ゐなかのひあたりみ
川のふちせをはかくら

人里

ちりけるもみぢ遊
樹々人もまちまちに至
ちりのようす
あしのこゑはる
おちのしれたち

鏡翁老詠

鏡のやとよいつもわれをむかしなれ箱をうつして老ないをもとを詠こける袂の中にうそたちよりて

經身事宿

凡てゆゑむ事理ねる身は老いやすきとよいつまでの山芋事なやらをほうて有そかうほうをおほをけ

しをそうほおくにに
ふくきとろろあまで
うちはるぬ
たちよりて春とす
きなんふみ山さら

山寺

如月のうけるみ
ちとせ
行はるれぬれくむせ
寺とふ山ちのあるあ
ちまねはなるち

秋夜

都

枕鐘

空

さの秋ふる夜ふるまく
に鳴まて都にそ
しかひきこたるこゝ
ちす枕ふ近よ鐘乃こゑ
たゝこきの空にたゝた

遺愛

庵

思

きてかの道ゆき寺の庵
くれ学よの養の住せあ
も示ゑ花あけむとな
はれふく行くゑ点此
わゝ格のゆゝ思こりて

物出

春ふかみ
うなゐ
みやこ出ていくの
もゝちねこよひた
のたゝまわひぬ

笠原野杉

ふの有るあきの野
をいて笠原
野原うちはらわと
にお言ふの言わと
杉むらあまを下茅ふき

朝霜

月日

霜の葉ふうはらん
ゆふ露もはかなくう
つる月日なれハ幾からも
ちをおもひ
かたらふなわつもれ

醒井

陰

ゆふおそ〳〵そそ冬
にしおゝ稲ゝれもりの
ゆふ〳〵ゝ
音にまく〳〵醒か井な
凡春を法そ〳〵ゝ木の

清水
涼
餘熱

しのゐのいそはよりなの
れ出つる清水あまわ涼
ちらしてもみまたて
てまくもに方にくむ
けくれの餘熱いまし

往還
班婕妤
團雪
暫

けまくはるるほもなれ急
往還の旅人おのくたち
よりてはくみあへる班
婕妤の團雪の扇秋風に
かくて暫く忘れぬれた

末遠
去
更
西行
柳

末遠き道なれども
去らんうちはそのうち
て更にいかれなかの
西行のうたの一ふしに
なりて柳うゑ給ふ

所

とて
れよりとりとりの
ひろまるもかれられ
ぬ和
其ものの姿れうけ
ーみむとふと

柏原
國
谷川

てはすまぬ
元人それき
柏原ふるさとをた
ちてみの國羽山
にもみぬ谷川霧代

底
梢
下道
越
不破

底におとれ山に松
の梢より通わたて
日数もふる人ぬ木はふる
けれ心ほそ越
えはてぬれを不破の

板
年經
攝政
荒
詠

冥屋なるかやゝの板ひさ
一年經るけるとしの山
里に住京極摂政殿の
荒れ行くまゝに秋
の風と詠まるるる

風情
言
葉殘

歌ゝもひ出てられてこの
上は風情もめてるかか
なられたる哥言の
葉を殘せんとなりゝ
まおほてはるをハむ

過所夜川端最中

なつかしうちるまきぬ
ふるさとの川ちかき所に
ちまたうりて夜市さはか
ほとゝぎす川端に立出て
うれしき秋の家中の時

河瀬照數

天きよき河瀬にうつる
ひてゝ照る月なみも數
まくかりてこゝろわ
なきあり二千里かの友人
はるかに遠く思ひわれ

故人遠思

筆染

花洛

一宵

て板のおもひ染おき
つゝくおほゆ月
はけよ筆を洗めて
花洛を出て、二日株瀬
川に宿して一宵はゝ

幽吟

先途

障子

幽吟を中秋三五夜の月
いたゞきめかたゝ遠情
を先途一千里は云て
おくるなと あ京家の障
子に書まゝらるゝ

萱津

萱津の東屋はおを過ぐ

里

おくらのくあたが

で里もそうはうに

はくとあと事今日を

市

市の日まなむはうまた

往還

そくふる往還は

手家花

なにしおふ手らもにむ隠
かくれぬ家けもかのみそ
のこゝろ人にうたらむと
ちゝ見つる恋のうたみに
くやうかたらておもひ

尾張
熱田

たゝなはらはいろ香も
しらぬいち人の恋た
はらからてうる

家春

尾張の国熱田の宮にい

神垣

たゝねの神垣ハあたらしかゝれるやうにてまゆみ

拜

て榊ゝをもてこれをたゝる木

森

立ちならべたつ森の木

夕日

の間より夕日のかゝたつ

朱

たゝへ入りて朱の玉

色

垣をゆゝしくたゝる注連

物

して風ふきまはされてゆ

中

らゆらゆ物にふまれて神

あひたる中にそはゝ

爭驚

知

見

暮

爭ふ驚むらのかなしも
知らぬ間に来ぬ人
雪の降もれる花うよ見
そて意ら白きものから
暮れゆくに出る月

聞

濱路

有明

友

ものゆえ思ふもまろ
ぬくゆ
ふの言をたらいて濱路
ふおもむ思ふ有明
月かけうて友ふ

千鳥
雀
経

千鳥ときゝおもふつまわ
かれる旅の宿ねられへ
まくらに催してなられ
かくしふくのこゑ
さるはとゐ日残経て

二村
山中

とほくなつみつゝうた
ゆふくしわいの
美連てくはしよ
やりて夜ねらちに二おふよ
かゝりて山中うそをらは

過

海面

山路

過るほとに見かくれ
うくしきみて海の面を
ほのぼのあけはたまち
波も穏もとまて山路
小てはたるわらはの

なるもむら
山の
ほのゝと
あらはれ
なるゝ
野原

昭和十三年元日

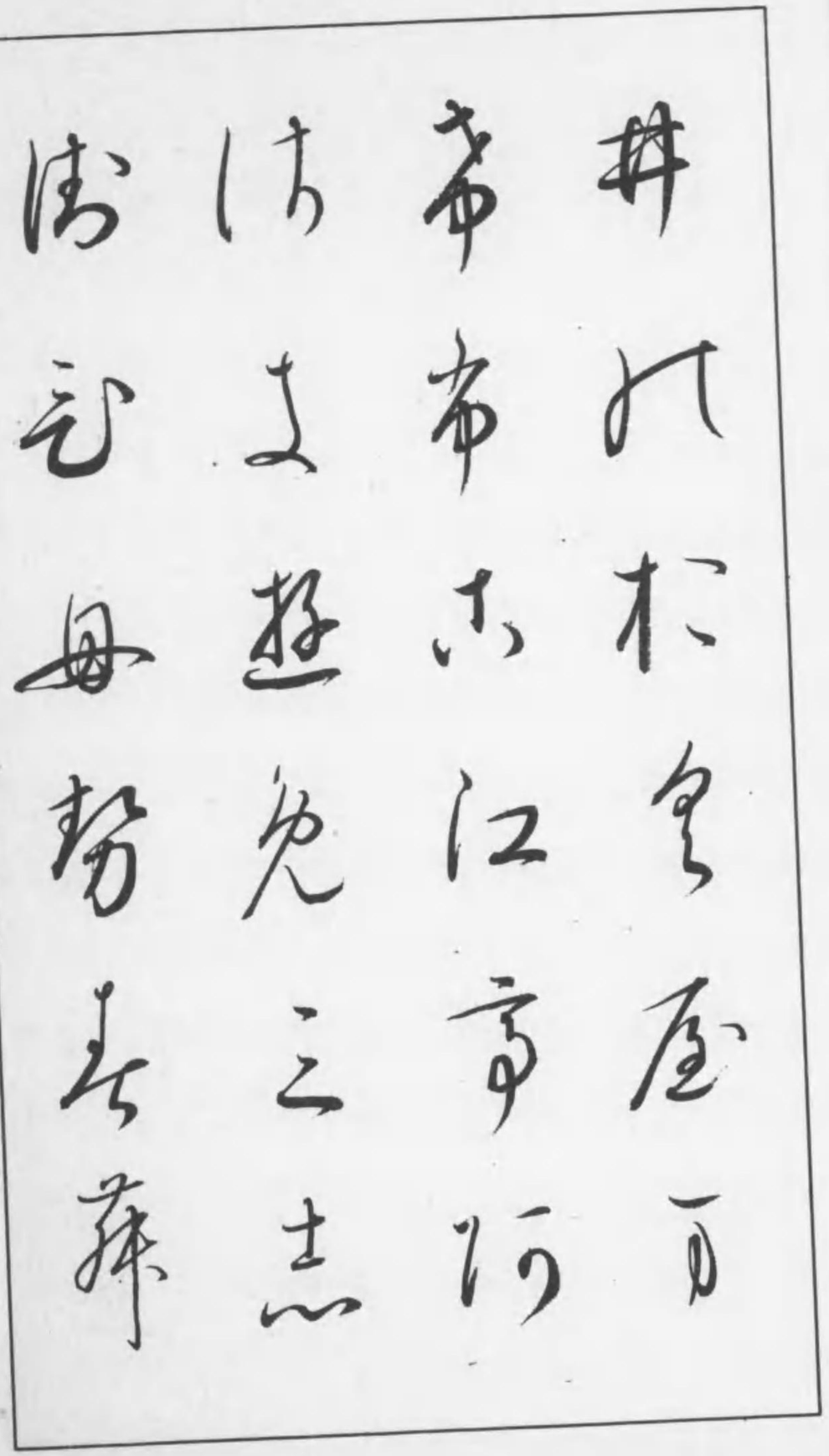
松下太郎書

政

いろはにほへと
ちりぬるを
わかよたれそ
つねならむ

あけのおく和まえ
きふこえてあ丨
恵ひきゆめみせす人

いろは歌
ちりぬるを
わかよたれそ
つねならむ
うゐのおくや
けふこえて
あさきゆめみし
ゑひもせす



假名の習ひ方釋文

一、わがせこがころもはるさめ
ふるごとにのべのみどりぞい
ろまさりける

二、うめのかをそでにうつして
とめたらばはるはすぐともか
たみならまし

三、としふればよはひはおいぬ
しかはあれど花をし見ればも
のおもひもなし

四、さとゝほみひともとがめぬ
さくら花いたくなわびそ我み
はやさむ

五、いろもかもおなじむかしに
さくらめどとしふる人ぞあら
たまりける

六、わがやどのはなみがてらに
くる人はちりなむのちぞこひ
しかるべき

七、花のちることやかなしきは
るがすみたつたの山のうぐひ
すのこゑ

八、よしのかはきしのやまぶき
ふくかぜにそこのかげさへう
つろひにけり

九、ほとゝぎすながなくさとの
あまたあればなほうとまれぬ
おもふものから

一〇、おもひいづるときはの山の
ほとゝぎすからくれなゐにふ
りでゝぞなく

一一、あまのがはあさせしらなみ
たどりつゝわたりはてぬにあ
けぞしにける

一二、あきかぜにはつかりがねぞ
きこゆなるたがたまづさをか
けてきつらむ

一三、やまざとはあきこそことに
わびしけれしかのなくねにめ
をさましつゝ

一四、おく山にもみぢふみわけな
くしかのこゑきくときぞ秋は
かなしき

一五、しらつゆのいろはひとつを
いかにしてあきのこのはをち
ゞにそむらむ

一六、ちはやふるかみのいがきに
はふくずも秋にはあへずもみ
ぢしにけり

一七、あめふればかさとりやまの
もみぢ葉はゆきかふ人のそで
さへぞてる

一八、たがためのにしきなればか
あきゝりのさほのやまべをた
ちかくすらん

一九、あきかぜのふきあげにたて
るしらぎくははなかあらぬか
なみのよするか

二〇、花みつゝひとまつときのし
ろたへのそでかとのみぞあや
またれける

二一、さきそめしやどしかはれば
きくのはないろさへにこそう
つろひにけれ

二二、ふみわけてさらにやとはむ
もみぢばのふりかくしてしみ
ちとみながら

二三、しものたてつゆのぬきこそ
もろからし山のにしきのおれ
ばかつちる

二四、ちはやふるかみよもしらず
たつたがはからくれなゐにみ
づくぐるとは

二五、わがきつるみちもしられず
くらぶ山きゝのこずゑのちる
とまがふに

二六、みやまよりおちくるみづの
いろみてぞあきはかぎりとお
もひしりぬる

二七、ゆふづくよ小ぐらの山にな
くしかのこゑのうちにや秋は
くるらん

二八、みちしらばたづねもゆかむ
もみぢばをぬさとたむけてあ
きはいにけり

二九、しらゆきのところもわかず
ふりしけばいはほにもさく花
かとぞみる

三〇、うめの香のふりおけるゆき
にうつりせばたれかことごと
わきてをらまし

以上和歌三十首は古今和歌集中
からす松尾色紙として殘れるも
のを採つた

三一、かゝるほどにおもはぬ
ほかに仁治三年の秋八
月十日あまりのころ都
を出でゝ東へ赴くこと
ありまだしらぬ道のそ
三二、ら山かさなり江かさなり
てはるゞ〳〵遠き旅なれど
も雲をしのぎ霧をわ
けつゝしば〳〵前途のき
はまりなきにすゝむ
三三、終に十餘日の日數をへて
鎌倉に下りつきし柵或
は山館野亭の夜のとま
り或は海邊水流のかす
かなる砌にいたるごとに
三四、目に立つ所々心とまるふ
し〳〵を書きおきて忘
れず忍ぶ人もあらば
おのづから後のかたみ
にもなれとてなり
三五、東山の邊なる住家を出
でゝ柵坂の關うちすぐる
ほどに駒ひきわたる望
月のころもやう〳〵近き
空なれば秋ぎりたち
三六、わたりてふかき夜の月
かげほのかなり木綿付
鳥かすかにおとづれ
て遊子なほ殘月に行き
けむ函谷の有樣おもひ
三七、いでらるむかし蟬丸とい
ひける世捨人この關の
邊にわら屋の床を結び
てつねは琵琶をひきて
こゝろをすまし大和歌
三八、を詠じておもひを遣べけ
り嵐のかぜはげしきを
わびつゝぞすぐしける
ある人のいはく蟬丸は延
喜第四の宮にておはし
三九、けるゆゑにこの關のあた
りを四の宮河原と名づ
けたりといへり
いにしへのわらやの
とこのあたりまでこゝ
四〇、ろをとむるあふさか
のせき
東三條院石山にまうで
ゝ還御ありけるに關の
清水を過ぎさせたまふ
四一、とてよませたまひける
御歌あまたゝびゆきあ
ふさかのせき水にけふ
をかぎりの影ぞかな
しきときこゆるこそ
四二、いかなりける御心のう
ちにかとあはれに心ぼ
そけれ
關山を過ぎぬればうち
での濱あはづの原なん
四三、ときけどもさだかにも
見えわかず昔天智天皇
の御代やまとの國飛鳥
の岡本の宮より近江の
志賀のこほりに都うつ
四四、りありて大津のみやを
つくられけるときくに
もこのほどはふるき
皇居の跡ぞかしとおぼ
えてあはれなり
四五、さゞなみやおほつの
みやのあれしより名
のみ殘れるしがのふ
るさと
あけぼのゝ空になりて
四六、勢多の長橋うちわたす
ほどに湖はるかにあらは
れてかの滿誓沙彌が比
叡山にてこのうみを望
みつゝよめりけん歌お
四七、もひ出でられてこぎゆ
くふねのあとのしら波
まことにはかなく心ぼそし
世の中をこぎゆくふ
ねによそへつゝながめ
四八、しあとをまたぞ
ながむる
このほとをも行き過ぎ
て野路といふ所にいたり
ぬ草の原露しげくして
四九、旅衣いつしか袖のしづく
ところせし
あづま路ののぢの朝つ
ゆけふやさはたもと
にかゝるはじめなる
五〇、らん
篠原といふところを見
れば西東へはるかになが
き堤あり北には里人住
みかをしめ南には池
五一、のおもて遠く見えわ
たるむかひのみぎは
みどりふかき松のむら
だち波の色もひとつ
になり南山のかげをひ
五二、たさねども青くして
洗濯たりすさき所々に
入りちがひてあしかつ

みなどおひわたれる
中にをしかものうちむ
五三、れてとびちがふさまあ
しでをかけるやうな
り都をたつ旅人この宿
にこそとまりけるが
今はうち過ぐるたぐ
五四、ひのみおほくして家
居もまばらになりゆく
などきくこそ變りゆ
く世のならひあすかの
川のふちせにはかぎら
五五、ざりけりとおぼゆれ
ゆく人もとまらぬ里
となりしより
あれのみまさる
のちのしのはら
五六、鏡のやどにいたりぬれば
むかしなゝの翁よりあ
ひつゝ老をいとひて
詠みける歌の中にかゞ
み山いざたちよりて
五七、見てゆかむとし經ぬ
る身は老いやしぬると
といへるは此の山の事
にやとおぼえて宿も
からまほしくおぼえけ
五八、れどもなほおくさまに
とふべきところありて
うちすぎぬ
たちよらでけふはす
ぎなんかゞみ山しら
五九、ぬおきなのかげはみ
ずとも
行きくれぬればむさ
寺といふ山寺のあたりに
とまりぬまばらなると
六〇、この秋かぜ夜ふくるまゝ
に身にしみて都にはいつ
しかひきかへたるこゝ
ちす枕に近き鐘のこゑ
あかつきの空におとづ
六一、れてかの遺愛寺のほ
とりの草の庵のねざめ
もかくやありけむとあ
はれなり行くすゑと
ほき旅のそら思ひつゞ
六二、けられていといたう物
かなし
みやこ出でゝいくか
もあらぬこよひだに
かたしきわびぬ
六三、とこのあきかぜ
この宿をいでゝ笠原の
野原うちとほるほど
においそのもりといふ
杉むらあり下草ふかき
六四、朝つゆの霜にかはらん
ゆくすゑもはかなくう
つる月日なれば遠から
ずおぼゆ
かはらじなわがもと
六五、ゆひにおくしもゝ名
にしおいそのもりの
したくさ
背にきゝし醒が井を
見れば陰くらき木の
六六、したのいはねよりなが
れ出づる清水あまり涼
しきまですみわたり
てまことに身にしむ
ばかりなり餘熱いまだ
六七、つきざるほどなれば
往還の旅人おほくたち
よりてすゞみあへり班
婕妤が團扇の扇秋風に
かくて暫く忘れぬれば
六八、未遠き道なれどもたち
去らんことはものうく
て更にいそがれずかの
西行が道のべにしみづ
ながるゝ柳かげしばし
六九、とてこそたちとまりつ
れどよめるもかやうの
所にや
みちの邊のこかげ
のしみづむすぶと
七〇、てしばしすゞまぬた
び人ぞなき
柏原といふところを
たちてみのゝ國關山
にもかゝりぬ谷川霧の
七一、底におとづれ山かぜ松
の梢にしぐれわたりて
日影も見えぬ木の下道
あはれに心ぼそし越
えはてぬれば不破の
七二、關屋なりかやゝの板ひさ
し年經にけりと見ゆ
るにも後京極攝政殿の
荒れにしのちはたゞ秋
の風と詠ませたまへる
七三、歌おもひ出でられてこの
上は風情もめぐらしが
たければいやしき言の
葉を殘さんもなか〳〵
におぼえてこゝをばむ
七四、なしくうち過ぎぬ

くひせ川といふ所に
とまりて夜ふくる
ほどに川端に立出でゝ
みれば秋の最中の晴
天、天きよき河瀬にうつろ
ひて照る月なみも數
みゆばかりすみわ
たれり二千里外の故人
のこゝろ遠く思ひやられ
天、て旅のおもひいとゞおさ
へがたくおぼゆれば月
のかげに筆を染めつゝ
花落を出でゝ三日株瀬
川に宿して一宵しば〳〵
七、幽吟を中秋三五夜の月に
いたましめかづ〳〵遠情
を先途一千里の雲に
おくるなどある家の障
子に書きつくるついでに
天、しらざりきあきのな
かばのこよひしも
かゝるたびねの
月を見んとは
荒津の東宿の前を過ぐ
天、ればそこらの人あつまり
て里もひゞくばかりに
のゝしりあへり今日は
市の日になむあたりた
るとぞいふなる往還の
八〇、たぐひ手ごとにむなし
からぬ家づともかのみて
のみや人にかたらむと
よめる花のかたみに
はやうかはりておぼゆ
八一、はなゝらぬいろ香も
しらぬいち人のいた
づらならでかへる
家づと
尾張の國熱田の宮にい
八二、たりぬ神垣のあたりち
かければやがてまゐり
て拜みたてまつるに木
立としふりたる森の木
の間より夕日のかげたえ
八三、だえさし入りて朱の玉
垣色をかへたるにゆふ
しで風にみだれたるこ
とから物にふれて神
さびたる中にもねぐら
八四、爭ふ鷺むらのかずも
知らず梢に來るるさま
霧のつもれるやうに見
えて遠く白きものから
暮れゆくまゝにしづま
八五、りゆくこゑ〳〵もこゝろ
すごく聞ゆ
この宮をたちいでゝ濱路
におゝむくほど有明
の月かげふけて友なし
八六、千鳥とき〳〵おとづれわ
たれる旅の空のうれへ
すゞろに催しこゝあはれ
かた〳〵ふかし
ふるさとは日を經て
八七、とほくなるみかだ
いそぐしほひの
みちぞくるしき
やがて夜のうちに二村山に
かゝりて山中などをこえ
八八、過ぐるほどにひんがしや
う〳〵しらみて海の面は
るかにあらはれわたれり
波も空もひとつにて山路
につゞきたるやうにみゆ
八九、たまくしげ
ふたむら山の
ほのゞゝと
あけゆくすゑ
は
なみち
なりけり

い以　ろ呂　は波　に仁
ほ保　へ戸(部)と止　ち知
り利　ぬ奴　る留　を遠
わ和　か加　よ與(よ)た太
れ禮　そ曽　つ川　ね禰(ね)
な奈　ら良　む武　う宇
ゐ爲　の乃　お於　く久
や也　ま末　け計　ふ不
こ己　え衣　て天　あ安
さ左　き幾　ゆ由　め女
み美　し之　ゑ惠　ひ比
も毛　せ世　す寸　ん无

い以　ろ路　は盤　に尓　ほ本
へ邊　と登　ち知　り里　ぬ努
る流　を越　わ王　か閑　よ與
た多　れ連　そ所　つ徒　ね年
な那　ら羅　む無　う有　ゐ井
の能　お於　く具　や屋　ま萬
け希　ふ布　こ古　え江　て亭
あ阿　さ佐　き支　ゆ遊　め免
み三　し志　ゑ衛　ひ飛　も母
せ勢　す春　ん舞

39.
314

昭和十四年九月十五日印刷
昭和十四年九月二十日發行　〔上製本〕

書道實習講座　第四回配本
假名の習ひ方　雜誌「國民書道」共
金七十五錢

著作者　松下太虛
東京市神田區猿樂町二ノ八
發行者　志水松太郎
東京市神田區神保町一ノ五二
印刷者　志水松太郎
東京市神田區神保町一ノ五二
印刷所　大日本出版社印刷部
東京市神田區猿樂町二ノ八
版權所有(46,259)

發行所　大日本出版社峯文莊
電話神田(25)二三九三番
振替東京一二三一二四番

頒布所　大日本國民書道會

大賣捌
東京　栗田書店　大阪　柳原書店
東京　東京堂　大阪　盛文館
東京　東海堂　大阪　福音社
東京　北隆館　名古屋　星野書店
東京　大東館　九州　金文堂
東京　大阪屋號　九州　大坪惇信堂

終